

# ウィズコロナピンチはチャンス去年今年

大司教・枢機卿 前田万葉

主の御降誕と新年のお慶びを申し上げます。

教皇フランシスコ来日の喜びの余韻のうちに迎えた 2020 年でしたが、新型コロナウイルスの蔓延で四旬節も復活祭も非公開典礼を余儀なくされました。さらに待降節もクリスマスもそして 2021 新年ミサさえもコロナ感染予防のため制限が続いています。しかし、ものは考えようで、「もし、コロナ禍があと数か月早かったら、教皇フランシスコの来日は実現しなかったかもしれない。数か月遅れが幸いした。」と捉えることにいたしましょう。公私ともに「プラス思考、ピンチはチャンス」でコロナ禍を乗り越えよう。

「すべてのいのちを守るため」という教皇来日のテーマは、コロナ禍の中でますます重みを増しました。具体的な「コロナいじめや差別、排除」を無くす呼びかけや「ともに生きよう」との励ましに繋がりました。教皇のメッセージ集『パンデミック後の選択』、回勅『Fratelli Tutti(仮訳:きょうだいの皆さん)』ともなりました。教皇のご意向を反映するために、2021 年の大阪教区目標を発表して、ご協力をお願いいたします。

## I、「すべてのいのちを守るための基金」創設

すでに教区司祭評議会や顧問会で承認されたことですが、「時報」の新年挨拶として全教区民に提示したいと思います。もちろん、教皇の来日講話などに応えるためです。また、教皇の呼びかけに応えるための、日本司教団メッセージに同調するためでもあります。

### 1、「核なき世界基金」への協賛のため

「核なき世界基金」は、被爆地を訪問した教皇フランシスコが、核兵器廃絶に向けた行動を呼びかけたことをきっかけに設けられ、広島教区の白浜司教は「すべての被爆者や戦争の犠牲者の慰霊のため核兵器廃絶へ連帯していきたい」と抱負を述べました。また、ICAN(核兵器廃絶国際キャンペーン)の川崎委員は、「いつかは実際に核兵器を解体する資金も市民で集めるという気構えでやっていきたい」と意気込みを述べました。「核兵器禁止条約」は、署名・批准国が 50 か国に達し、2021 年 1 月 22 日に発効が決まりましたが、署名・批准国を 100 か国に増やすことを目標に据えています。また、唯一の被爆国・日本の署名・批准を要請し、少なくとも核

兵器禁止条約の締約国会合にオブザーバー参加を呼び掛けることにしています。これら「核なき世界」活動のための基金に、協賛法人として継続的に参加するためです。

## 2、「こうのとりのゆりかごイン関西」への協賛のため

「お腹の中の赤ちゃんも大切な社会の一員であることを啓発する様々な活動」への協賛法人として参加し、支援していくためです。

## 3、「災害緊急救援」のため

突如の災害救援に直ちに対応できるようにするためです。

## 4、「環境保全」のため

「ラウダート・シ」で呼びかけられた、「自分たちの住む家を大切に」するため、特に「環境保全」活動のためです。

このような目的のために、毎年9月1日から10月4日の「すべてのいのちを守る月間」中に、全教区に特別献金をお願いいたします。集まった献金の用途は、災害対策委員会において検討され、実施後に教区の皆様にご報告いたします。

## Ⅱ、「福者ユスト高山右近列聖」推進

### 1、「冬の虹仰ぎて行くや右近祭」

2017年2月7日大阪城ホールでユスト高山右近列福式が行われたことは大きな喜びでしたが、決して目的達成ではありません。全世界の信仰の証し人になっていただくためにも、列聖へ向けての祈り活動が不可欠です。その列聖への新しい起爆剤

となる出来事が起きました。2019年10月11日に、東京教区にあった列聖申請管轄権が大阪教区に返還されたのです。そしてさらに、2020年10月2日に「ユスト高山右近生涯図10点」が、作者の村田佳代子様(雪ノ下教会所属)から寄贈されました。その公式披露を兼ねて、2021年2月6日に、大阪カテドラル聖マリア大聖堂で、「福者ユスト高山右近列聖祈願祭」を行います。右近列聖へ向けて、大阪教区あげての本格的取り組みの再出発といたしましょう。

## 2、「大阪セナリオ」の開設

右近が日本宣教のために尽力したのは、特に「セナリオ」活動でした。織田信長が築いた安土城の城下に「安土セナリオ」を建設し、宣教師たちと協力して司祭養成に力を注ぎました。日本二十六聖人のリーダー格であった聖パウロ三木は、このセナリオで学んでいます。村田画伯の「右近生涯図」にも光が当たる聖パウロ三木が描かれています。昨年始めた「大阪セナリオ」にも今年は確実に「新セナリオ生」が学ぶ予定です。召命促進のご協力をお願いいたします。

## Ⅲ、ウィズコロナ、アフターコロナ

コロナ禍は、教会のミサ、秘跡、典礼など、カトリック教会にも新生活を余儀なくすることになりました。十分な感染対策を講じつつ、ミサや各秘跡の恵みを共有できる、新しい教会づくりが求められます。また、宣教・司牧のオンライン化という新しい手段も取り入れられ始めました。一方、「宗教＝家の中で示す教え」、「宗教＝RELIGIO＝再び結びつける」、「教会＝エクレジア＝集い」など、「ソーシャルディスタンス」との論議も聞かれるようになりました。教皇のメッセージ集『パンデミック後の選択』、回勅『Fratelli Tutti(仮訳:きょうだいの皆さん)』の教えにも照らしながら、教会の新しい生活を探ってまいりましょう。